慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	市原季一著 ドイツ経営学 : ドイツ的経営学の生成と発展
Sub Title	
Author	小島, 三郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1955
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.48, No.12 (1955. 12) ,p.959(55)- 961(57)
JaLC DOI	10.14991/001.19551201-0055
Abstract	
Notes	書評及び紹介
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19551201-0055

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

もに私的」（同上）であるから、というのである。

ところが、「社會的生產諸力の展開とともに社會的生產諸力の性格も同時に變化し」（三四頁）、「生產は私的なものから社會的なものに發展」した（三七頁）。しかるに「領有形態だけが古いものにとどまつている」（同上）ので「それは生產の社會的性格と矛盾する」（同上）に至る。エルスナーによれば、この矛盾こそが「資本主義的生產方法の根本的矛盾すなわち生產の社會的性格と領有の資本主義的性格とのあいだの矛盾」であり「恐慌の究極の原因」なのであるが、彼が「生產の社會的性格」というとき、それは「こまごました私的な生產手段から巨大な社會的な生產手段になつた」（三四頁）ことであり、靴屋の小刀は强力な打拔機に、ハンマーは穿孔機と製釘機（Zwick-und Nagelmaschinen）によつてとつてかわられ、「もはや個々人によつて利用されるのではなく、ただ生產者の一群によつてのみ、勞働者全員によつてのみ運轉することのできる一つの複雜な生產機構が成立した」（同上）ことを意味している。從つて、生產物の完成について言えば、直接生產者は以前には「鼻を高くして……これは俺の生產物だ、これは俺がつくつたのだ」（三一―二頁）と言いえた「個人的行爲から勞働者全員が參加する社會的行爲になつた」（三五頁）ということである。これらの表現のうちに明らかなように、エルスナーは「生產の社會的性格」を技術主義的に考えているようである。なるほど生產の社會化される過程は、必然的にそのような特徵をもつて伴われるものであるが、そのような「生產手段の集積・集中、勞働過程の社會化は確立した社會的分業の生產力的內實であり、生產の社會的性格を生產力視點からみたものにすぎない」（拙稿「石渡貞雄著『農業恐慌論』」本誌昭和二十九年七月號、七〇頁）。生產の社會的性格とは、なによりもまず、社會的分業のことに他ならないのであつて、從つて商品の使用價値は、個人的な使用價値ではなくて社會的使用價値であるということである。だから、エルスナーのように、單純な商品經濟においては、生產は私的であるときめつけることはできない。それは私的であると同時に社會的でなければならない。社會的なるが故にこそ、生產物が商品として價値を有するのであり、商品の使用價値は社會的使用價値として價値の質料的擔い手となるのである。「生產物が私的消費のためではなく、社會的消費のためにあてられている」（三五頁）ことは、資本關係の存在には何らかかわりないものであり、商品生產一般において正にそうであつたのである。單純商品經濟から資本制經濟になつてはじめて、生產が私的なものから社會的なものに轉化したのではない。單純商品經濟なる概念は資本制經濟からの抽象にすぎない。資本制生產樣式に歷史的に先行する生產樣式は封建制生產樣式であつて、單純商品經濟ではない。從つて、私的生產が社會的生產になるのは、封建制生產樣式の資本制生產樣式への推轉によつてであつて、單純商品生產の資本制商品生產への轉化ではなかつたのである。論理的展開の順序を歷史的發展の順序と同一視してはならない。

この種の誤謬は「社會的生產と資本主義的領有とのあいだの矛盾は恐慌の究極の原因（letzte Ursache）」（三七頁）ではあつても、「この矛盾がただちに恐慌にみちびくものではない」（同上）く、「それは資本主義的生產方法の新しい、より進んだ諸矛盾に發展し、これらの諸矛盾がそれぞれの面で恐慌をよびおこす」（同上、傍點引用者）、といつた表現のうちにもあらわれているといえよう。ここでは、抽象から具體への上向法的（論理的）發展が、現實の經濟的發展の度合と混淆されている。

また、マルクスによつて「あらゆる現實的恐慌の究極の根據（letzte Grund）」（Das Kapital Bd. III. S. 528.）とされた「生產と消費の矛盾」（拙稿「恐慌の資本制的性格といわゆる"Der letzte Grund"について」本誌昭和二十九年八月號、一八頁以下參照）をもつて「恐慌の原因（Ursache）をなすものである」（五〇頁。S. 41.）となして Grund と Ursache との區別をせず、一方において、マルクスの恐慌理論は「恐慌を過少消費から說明するものではない」（五〇頁）と言いながら「この矛盾（「生產と消費の矛盾」……引用者）においては大衆の過少消費が決定的な役割を演じている」（同上）というとき、論理不明快乃至論證不充分といわなければならない。

三

その他、論理的にその連がりの不明快な箇所が尠くないが、總じて本書は恐慌理論において問題とさるべき諸理論を總括したものとして、恐慌史の概說と相俟つて恐慌論の體系的理解のために役立つであろう。だが、本書の高く評價さるべき點はむしろその點ではなく、恐慌の社會的諸結果を明らかにして（第一篇第四章）、「經濟恐慌の理論がプロレタリア革命の理論につながつて行く」（一九三頁。S. 160.）ことから「循環的發展と革命運動との關連を指摘して」（同上）、恐慌論研究の實踐的視角を再認識せしめたところにあつたのである。

その意味において、續くであろう第二卷に期待するものではあるが、一八八二年の恐慌の特殊性が「農業恐慌とむすびついていた點にあ」（三二〇頁）りながら「農業恐慌のうちに循環的恐慌の決定的原因を見るのがあやまり」（三二一頁）であるとするならば、「一般的な過剩生產恐慌」と農業恐慌との關係が理論的に解明されていなければならなかつたのではなかろうか？（B6版　三三五頁、大月書店、一九五五年三月一五日、定價三六〇圓）（常盤　政治）

市原季一著『ドイツ經營學』

――ドイツ的經營學の生成と發展――

戰後の我が國經營經濟學は、著しいテンポを以つてアメリカ經營學への接近をなし、ために專ら實證的個別研究に力をそそぎ、どうかすると體系化、整備化の努力が無視せられた。勿論、このアメリカ經營學への接近自體、從來のドイツ經營學が持つ、民族共同體的、規範的經營學に對する反省という意味を有して居たが、しかしそれは同時にドイツ經營學、特に規範經營學における興味ある研究をも同じ範疇のものとして排斥する傾向があつた。而して昨今に至りそ

のアメリカ經營學にも漸次反省の目が向けられるに至り、ここに再びドイツ經營學への再檢討、更には新しい經營經濟學の體系化努力が現われ始めたのである。

ここに書評する市原季一著「ドイツ經營學」も、斯かる趨勢の一端を擔つて居るものであることは注目に價しよう。卽ち著者はその副題にもある樣に、「ドイツ的經營學の生成と發展」を、新しい經營學の體系整備のために、「はりめぐらされた網の目の如き關係をニックリッシュを支柱としてひとつひとつたどらん」（序文）として居るものである。

さてこの樣にこの書はドイツ經營學を新しい體系化に向つてその生成と發展を跡付けて居るのであるが、その最も著しい特質は著者自身の經營學に對する態度をその出發點に抑出して居るということである。從つて著者は第一章において「配列と選拔」の問題を取扱い、彼の方法態度から選拔法を規定し、以下シェアーの「商業經營論」、デートリッヒの「經營科學」を經營學の先驅となし（第二章）、このうち特にデートリッヒの經營の內部生活を考察の中心とし、利潤概念を排し、經營維持の原則を二義とする思考を受繼いだニックリッシュ（第三、四章）、更にニックリッシュの組織論を修正し、展開したシェーンプルーク（第五章）という一系列を自己の態度との相關連に於て檢討している。そして斯かる系列上の諸學說の本質を、より明確たらしめるという意味で、シュマーレンバッハ、リーガー、レーマン、シュミット（第七、八、十、十一章）を比較して居るのである。

そこで斯かる系列中のドイツ經營學と著者の態度との相關連を少しく說明してみよう。

デートリッヒは經濟科學を流通科學と經營科學に分けて、初めて經營の內部生活を科學的研究の對象とし、且つその場合、經濟生活はその擔い手が人間であるが故に、經濟生活原理は人間の本質から引出されるべきであるとし、經營を勞働共同體として把握した。これは第二期からのニックリッシュに受繼がれ、ニックリッシュはこれを組織論として經營學を形成したのである。そして彼の場合組織論とは所謂經營組織論とは異り、その本質を人間の哲學的本質に求める精神的結合であるとし、そこから組織第一法則は人間の「良心の法則」に求めたのであつた。つまり彼は「人間の良心という直接的自己意識に於て彼自身全體であると共に、部分として意識し、この意識が人間をして共同體を形成せしめる」と說明したのである。そしてニックリッシュのこの規定は明らかにアプリオリー的であるが故に、シェーンプルークはこれを社會構成體概念から規定付けようとしたのであつた。シェーンプルークによれば、社會構成體は一つの統一的意志をもたぬ開放的構成體と、一つの統一的意志により形成される封鎖的構成體とからなり、前者は國民經濟であり、それを對象とするのが經濟學であつて、後者こそが經營であり、又それを對象とする學問が、ニックリッシュの意味での組織論、從つて經營學であると考えたのである。

このシェーンプルークの主張を、實にこの書の著者が受け繼ぎ、修正し、展開して居るものに外ならない。卽ち著者は先ずこの系列を忠實に追つて研究し、基本的にはニックリッシュの組織論に贊成するが、そのアプリオリー的規定には反對してシェーンプルークに贊同する。そして更に經營經濟の形式的側面をシェーンプルークの封鎖的構成體に限定せしめず、ゾンバルトの團體の概念に迄擴張して、著者の經營學は完了するのである。

ではここにこの著に對する疑問及び問題點の二、三を擧げておこう。その一は同書に於けるドイツ經營學者選拔方法と、著者の態度表明との問題である。著者が自らの態度を明確にする事自體には何ら問題はない。しかしそこで選拔される學者群は所謂ドイツ規範學派か、或はその亞流と見なされる人々である。而して凡そドイツ的經營學の生成と發展を問題とする限りは、著者の興味が如何であろうと私經濟學派を無視することは出來ない。リーガーはニックリッシュと共に兩極端であるとし乍ら、ニックリッシュに立つということは、兩者を沒價値判斷的に取扱つた僻結として支持するのでなければ意味がないのではないか。又その意味で著者のシェーンプルークの「配列と選拔」批判にも首肯し得ない。著者はシェーンプルークの選拔を自己の態度から特殊な分類と言われるが、シェーンプルークの眞意はこれら私經濟派等をも含めて、結局するに學派の對立は世界觀の相違であると見ることに存するのであるから、著者はその眞意をもつと理解すべきではなかつたかと思われる。第二の問題は著者はニックリッシュと特にシェーンプルークにその支柱を求められて居るが、その間彼らを批判的に考察する場合の著者の概念規定が不明確であるということである。例えば著者のいう經濟性なる概念も、本源的な限界概念としてのそれか、ニックリッシュ經營學上のそれか、又その他のものであるかは全く不明であり、且つ社會學的考察と組織論的考察という場合もその內容的區別は判然としないのである。

かくしてこれらの疑問及び問題點は存するが、全體としては、斯かる方面の研究の數少い我が國では、又最初に述べた我が國の現狀からすれば推奬し得る書の一であるといえよう。（A五版　森山書店刊、定價三八〇圓）

（小島　三郎）